

リンク

倉沢瑠那

……ピッ……ピッ……ピッ……ピッ……ピッ……ピッ……
嘘だ。

『ねえ湊太？』
……ピッ……ピッ……ピッ……ピッ……ピッ……ピッ……
……嘘だ。

『あなたに出逢えて、幸せだった。』
……ピッ……ピッ……ピッ……ピッ……ピッ……ピッ……
こんなにも強く、美しい花が、
『だから、お願い。笑って……？』
……ピッ……ピッ……ピッ……ピッ……ピッ……ピッ……

誰からも愛されてきたこの花が、



『……そうよ。ふふっ、相変わらず綺麗な顔ね。本、当に……。』

……ピッ……ピッ……ピッ……ピッ……ピッ……

今、散ってしまうなんて……！

『……っ、あ……りが……と……』

……ピーツ……ピーツ……ピーツ……

そんなっ！

「……っあ、遙……ッ！ はるかああッ！」

「えっ？ 急に、どうしたの？」

「……はあっ、はあっ……え……っ？」

あれ、ここ、病室じゃない。

でも、俺の顔を覗き込んでいるこの人は！

「遙?! 何で……！」

「ちがうよ、はるかさんは、ふうかのお姉ちゃん、だよ。ふうかはふうか！ ちゃんと見て！ ほら！」

遙だと思っていたその人は、俺の前で可愛らしくくると一回転してみせた。

なんだ、風佳か。びっくりした。

昼寝してたんだけ。

「お姉ちゃんのこと教えてくれたの湊太くんなのに、間違えないでよー！」

「ごめんー。」

苦笑いで頭を撫でる。

……またあの時の夢、か。もうこれで何回目だろう。

それにしても風佳、段々遙に顔が似てきたな。

あんな夢の直後に顔覗き込まれたら、そら間違えるわ。歳が離れてるとはいえ、やっぱり姉妹なんだよな。
「湊太くん？　なんかあった？」

「んーん、別に何もないよ。」

「そう？　悲しそうなお顔してたから……。」

心配そうにこちらを覗く瞳が何処となく遙に似てて、胸が苦しくなる。

というかこの子、聡いな。

変に隠さない方が良さそうだ。

「ちょっと、遙のこと考えちゃって。」

「そっか。……ねえ、もし嫌じゃなかったらさ、……はるかさんのこと……もっと、教えてくれないかな？」

「え……。」

「あ……。ごめん。湊太くんの気持ちわかんないのに、こんなこと言っちゃってごめんね。忘れて……。」

うっわ、こんな小さい子に気を遣わせてどうするよ。

風佳、あからさまに落ち込んでるし！

「いやっ、そう……じゃなくて……っ！　どこから話そうかなって……考えてただけ……だから、ね、その……。」

「あぁ……俺嘘下手すぎねえ……？」

「ほんとっ?!　いいの?」

風佳の顔がぱあっと明るくなった。

……まあ、風佳が喜んでくれたなら結果オーライってことで。

「おう。何から聞きたい?」

「んーと、この前はお名前きいて、ふうかが二さいぐらいのときに、えっと……。……た?　たかい……?」



しちゃったってこと、きいて……。」

「たかい……?」

「……ああ、他界、か。」

「よくそんな難しい言葉知ってんなあ。死んじゃったって言ってもいいよ。」

「え……と、湊太くん、あんまり言いたくなさそうにしてたから、言わない方がいいかなって、思って……。」

「……。」

「だって、湊太くんの大切な人、だったんでしょ……?」

「……ん、そう、だね。」

「ねえ、大切……って、どんな感じ?」

「え……。」

大切って……。」

あ、はっきり言わないと分からないか。あまりにも賢すぎて、まだ小学一年生だったの忘れてたわ。

「ごめん、言い忘れてたね。遥は俺の、恋人、だったんだよ。」

「そっか。はるかさんのことが、好き……だったんだね。」

「ああ。すきだったよ、すごく。」

「湊太くん。顔、赤いよ?」

「よ……っ、余計なとこに気付くんじゃねえ……恥ずかしい……。」

かわいー! と言いなながらけらけらと笑う風佳。今はそれが愛しい。

「可愛くねえし。」

「湊太くん照れてるー!」

「うるせえ……。」

でも、こういうところは年相応なんだな。少し安心する。

風佳はいつも、大人っぽすぎる。

「ごめん、話逸れちゃったね。じゃあ、風佳が嫌じゃなかったら、亡くなった時の話でもする？」

「うん。ふうかは大丈夫。」

「俺の情けない話なんだけどな？」

忘れもしない、高校一年の春。風の暖かい日だった。

俺のバレーの試合を、遙と遙のご両親が見に来てくれたんだ。

母親同士が昔から仲良しだということもあり、遙と俺が付き合っていたということもあって、特にお母さんはノリノリで来てくれた。

『えー、湊ちゃんのママ試合行けないの？　じゃあその日ちょうど休みだし、遙とパパ連れて見に行っちゃおっかなー！』

というように。

試合は、みんなの声援があり、大勝利を収められた。

『遙、応援ありがと。……また来て、くれるか？』

『行く行く！　湊太が真剣にやっていると、久しぶりに見たかも。』

『そんな事ねえだろ。』

『まあ……かっこよかったよ。』

『……それはずるい。』

『何がー？　あ、来週の私のバスケの試合、見に来てよ！』

『気が向いたらな。』

『絶対来てね。約束！』



『はいはい。約束な。』

なんて幸せな会話をしながら、来週空いてたっけ……と思考を巡らせる俺は、その約束がお互いに果たせなくなってしまうなんて考えもなかったんだ。

『おーい湊太！ 帰りの配車俺の車だから早く来いよ！』

『おう！ ……ごめん遙、呼ばれてるから俺帰るわ。』

『湊ちゃん、うちの車乗ってきなさいよ。そっちの方が楽でしょう？』

『いやいや、申し訳ないんで大丈夫っすよ。』

『さっと遙も喜ぶわよ？』

……お母さん。そう言われたら乗りたくなっちゃうじゃないですか。

『……じゃあお願いします……。』

『ふふっ。了解。』

俺押しに弱すぎだな。もうちょっと断れるようにしないと。

『ごめん！ 俺今日配車いいわ！』

『あいよ。じゃあもう行くからな！』

『おう、お疲れ！』

『お疲れ！』

そうして遙の車に乗せてもらってから数十分後。交差点で信号待ちをしていたとき。

……ぶつかる！

そう思った時にはもう遅かった。

俺には何も出来なかったんだ。遙を守ることも。ただ抱きしめることさえも。

その後の記憶はないが、やはり車両衝突事故だったらしい。後から聞いた話だが。

相手は軽トラック。

酒気帯び運転の、前方不注意。

「前方不注意」で済んでたまるか。腸が煮えくり返りそうだ。事故の後、初めて目に入ったのは白い天井。そして、点滴。……ここ病院か。消毒液の匂いもする。

『湊太さん、目が覚めましたか。』

『……はい。』

『どこか痛いところなどございませんか。』

『特には。』

『それは何よりです。気になることなどもございませんか？』

『特に……あ、待ってください。一つだけ……気になることが、あるんですけど。』

『はい、どうされましたか？』

最悪の事態を考えてしまって、思わず顔が歪む。聞きたくないけど、聞かなきゃ、いけない。きっと大丈夫。そう、安心するために一応聞いておくだけだ。

『あの、はるか……げほっ！　っは、げほっ！』

きっと、

『ゆっくりで大丈夫ですよ。ゆっくり、息をしてください。』

……きっと、

『っ、はぁ……っ！　はぁ……はぁ……』

……きっと、大丈夫なはずなんだ。

『大丈夫ですか、湊太さん。』

ねえ、きっと……！



『はい。すみません。……あの、遥は！ 無事、なんですか。』

『……私からは、言いかねます。』

『それって！』

『ただ、面会は出来ますよ。』

『会わせてください。』

『……はい。』

そう言って看護師さんは、俺を遥の部屋に案内してくれた。

遥は俺の顔を見ると、安心したようにふわりと笑った。そして、いくらかの言葉を残して、静かに零れ落ちていった。

俺は最後まで何も出来ずに、どうしようもなく、ただただ無力な存在であるだけだった。

それから、自分を責める日々が続いた。

何で俺は生きているんだ。

もういっそ、俺も死んでしまおうか。

……いや。そんなことは戯言だっただけぐらい、心のどこかで気付いてる。

それなら、何が出来る？ それなら……。

……泣くな。壊すな。

何も出来ないよ、俺には。でもそれならせめて、この人をこれ以上傷つけないように、絶対に忘れないように、自分の心に刻み込むんだ。

そして、伝えるんだ、君の言葉を。

繋げるんだ、君の残した夢を――。

「うっ……うえ……っ！ ぐすっ……」

「風佳っ?! ごめん、嫌な話だったよな。ごめんな。ごめん……。」

「う……ふうかのお父さんとお母さんも、そこで死んじゃったんだ……! うえ……!」

そう。つまり、風佳の家族は、保育園に預けられていた風佳以外、全員……。

また、こうやって風佳が俺の家で暮らしてるのも、子供を育てられる状況にある親戚がいなかったから、一番接点が多かった俺らが引きとることになった、という訳である。

つまり、義理の家族。

育て親が生みの親ではないということは、この歳だがもう風佳は知っている。

二年間も育ててくれた人を忘れるはずもなかったから、そう伝えるしかなかったのだ。

「ごめん、風佳。」

「ううん、ほんとおはなし……っ、きけて、う……よかったの。」

「でも、悲しくなったよな。」

「う……ん。すごい、悲しい。……っ、でも、ね、もう変えられないことは、泣いても変わるんないから。……う、でも、今、こうやって湊太くんたちといっしょに暮らせてるから、ふうかは幸せだから……っ、ほんとは、笑わなきゃ、いけないよね……。」

「風佳……遥に、そっくり。」

「……え?」

本当によく似ている。どこまでも。

「遥も、よく幸せって言葉を使ってたんだ。幸せを見つければ、笑顔になるから……みんなと笑って暮らすのが、私の夢だから……って! だから、最後まで強かったんだ。……このことを、誰かに伝えたくて……っ、俺は、生きてる。このことを伝えるために生きていくって、決めたんだ……!」



「うん、伝わったよ、はるかさんの思い。ぜったいに、忘れない。」

「湊太ー！ 風佳ー！ 買い物行くわよ。おりてらっしゃい。」

「はーいー！」

声がそろって、二人で目を合わせて笑う。

「さあ、しみりした話はやめにして、気晴らしに出掛けようぜ。」
というと、

「うん！」

と満面の笑みで返してくれたのだった。

寝癖を直して、涙の跡を拭いたら、準備オツケー。

「お母さん、今日はどこ行くの？」

「街の服屋さんよ。」

「服？ やったー！ おしゃれな靴はいてこーっと！」

「風佳、今日は動きやすい靴にしてください。」

「えーっ、なんで？」

「なんでって……。歩いて行くんだもの。」

「え、バスじゃないの？」

「歩いていくわよ。運動のためにも。」

「えー、遠いからやだー。この前も歩いて行ったからいいじゃん。」

「でも……。」

母さんは目で俺に助けを求める。

といっても、俺のためなただけだな。

俺はあの日以来閉所恐怖症で、車に乗ることはおろか、部屋のドアも閉めたことがない。

バスか……。車よりはいいけど、他のお客さんに迷惑かけちゃうかも、だよな。それならまだ恐怖心は強いけど、車か。

「……風佳、車でもいい？　バスだとお金かかるしさ。」

「うん、いいよ。」

「湊太、車って……大丈夫、なの……？」

「もう時間経ってるし、大丈夫だよ。それに俺、もう大学生だし。そろそろ車の免許も取らないとだから。」

「……無理、しないでね。」

「湊太くん、車乗ると酔っちゃうの？」

「ううん、そういう訳じゃないよ。ほら、行こ。」

「行こー！」

風佳と勢い良く玄関を飛び出したのはいいが、車を目の前にして、少し躊躇ってしまう。……だめだ。こんなところで止まってる場合じゃない。ここで止まったら、先に進めない。

そうやって勇気を奮い起こして車に乗り込むと、バンッとドアを閉める音が響く。

「う……っ」

もう完全に外気から遮断された。

しかも……やっちゃった。あの日と同じ座席の位置。俺だけが助かった座席の位置。

「は……あ……」

それに風佳は、遥と同じ位置だ。

また救えない、また何も出来ない、また……。

車のエンジンがかかる音がした。

「ん……。ごめん、やっぱり歩いて行ってくれるか……？」

「だーめ！」

「風佳！」

「だめなの！ 湊太くんこんな調子悪いのに、無理して出掛けちゃだめ！ お洋服はふうかが買ってきてあげるから、湊太くんはおうちで休んで。ね？」

「そうね。風佳の言う通りよ。」

「ごめんな、迷惑かけて。休んでいい？」

「うん、気をつけてね。でも、ふうかが歩きたくないって言ったせいだよね……。」「

「違うよ。俺が自分を過信してただけ。」

「そう……。？ じゃあ、ふうかが格好良い服選んできてあげるから、元氣だして！」

「うん、ありがと。待ってる。」

二人を見送ってから部屋に戻ってベッドに寝ころび、枕に顔をうずめる。

……正直、あそこまで恐怖に駆られるとは思ってなかった。絶望感も、拭いきれたと思っていたのに。

……少し落ち着こう。ゆっくりと目を閉じる。

『早く早く！』

初めて君と海に行った時、ものすごくはしゃいでたよな。少し走っては振り向いて、早く早くって急かさされてたっけ。

『一緒に見よう。いっせーのーで！』

君が星空を見せてくれたこともあったな。

意外とサプライズ好きで、いつも俺を驚かせてくれて。その中でも、あの夜空は別格だった。あんなに美しいもの、俺一人じゃ見つけられない。



『……手、繋いでいい？』

初雪が降った日。寒いから、とか、風邪を引くと困るから、とか、色々な言い訳を考えて俺は君に言ったんだ。二人共、その日はなぜか敬語だったよな。赤く染まった頬は、本当に寒さだけが原因だったのか、とか考えると、恥ずかしくなるけど。

『夢にしては、できすぎだよね』

って、少しふざけて君は言った。でも本当は、ちゃんと現実だって実感してたよな。……そうじゃなきゃ、あんなに嬉しそうな熱い雫は、零れない。

……ほら、少し目を閉じるだけで、アルバムのページをめくるみたいに、たくさん思い出が溢れ出してくる。

この思い出が、いつまでも鮮やかであるように、色褪せないように、俺は――。

「……そ……ん、湊太くん、起きて！」

「う……ん……。あれ、もう朝……？」

いつの間にか、また寝てしまったらしい。

「具合、大丈夫？」

「うん、おかげさまで。」

「よかった！ あのね、昨日歩いていった途中にね、すごいきれいなお花見つけたんだ！ 湊太くんにも、見てほしいの！ 一緒に行こ？」

「いいよ。一緒に行こうね。着替えたら。」

「やったあ！ お母さん、いいって！」

「よかったわね。じゃあ風佳も着替えましょう。」

昨日俺は行かなかったのに、わざわざ歩いて行ってくれるような優しさをこの子も持ってるから、いつも姿

を重ねてしまうのだろう。

「風佳ー！ 着替えたよ。風佳ももう行けるー？」

「あとちょっと！ ……うん、行けるよ！」

「よし！」

ドアを開けると差し込んでくる春の日に目を細めながら、ゆっくりと足をふみだす。

「湊太くんおそいー！ 先行っちゃうよ！」

「すぐ行くよ。」

君はいつも、走り出して数秒後に振り向いて言うんだ。

『早く早く！』

「ッ！」

……きつと春の風が吹いたから、思い出したんだろう。

「わかってるよ。」

……わかってる。

俺は少しだけ上を向いて追いかけた。

「っーかまえた！」

「わっ！ 足、速！」

「ふふっ、一緒に、歩いてこうな。」

「はーい！」

大丈夫、ちゃんと繋いでる。

この先も、繋いでみせる。

小さな手も……君の、夢も。